

山本鮎里

芸術文化キュレーションコース

文化政策論

はじめに

近年、多くの伝統的工芸品産業はライフスタイルの変化や後継者不足などの問題を抱え衰退している。しかし、その中でも現代のニーズに合わせた新商品の開発や産業観光(工場見学、製作体験)という新しいサービス形態に着手し売上を伸ばす産地も存在している。特に富山県は国指定の伝統的工芸品が6つあり、2次産業の従事者数が全国1位と屈指のものづくり県で、産業観光施設に焦点を当てたガイドブックが多数発行されるなど県内の産業観光の動きも非常に活発である。産業観光には「地域の活性化」「企業の発展」「観光客への教育効果」など様々な有効性がある反面、「課題対応の役割分担が不十分」「持続性に乏しい」などの課題も抱えている。よって小規模な事業所は人材不足などの問題から、継続的に事業を実施できない、または事業実施に踏み出せていないのが現状である。

そこで本論文では先行研究の調査に加え産業観光の実証実験を実施し、事業にかかわる3つの主体(参加者側、受け入れ側、運営側)の果たすべき役割について究明し、持続可能な産業観光システムの要素を明らかにすることを目的とする。

方法

産業観光についての先行研究を調査し、発展の歴史や定義の分類、その有効性と課題についてまとめる。また富山県砺波市の伝統的工芸材料「庄川挽物木地」産地で、工房見学と職人指導のもと行う木皿の製作体験を含む産業観光事業を実験的に実施した。その主な内容は工房見学と木皿の製作体験である。そこで実際に筆者が運営側を担い、情報発信や企画プログラムに関する打ち合わせなど事業開催までのプロセスや業務内容を具体的に明らかにしていく。加えて受け入れ側となる職人へのヒアリングや、参加者へのアンケート結果をもとに、3つの主体が果たすべき役割と持続可能な産業観光システムの要素について究明していく。

結果と考察

先行研究から整理した産業観光の有効性及び課題の整理、実証実験で得られた結果から、3主体の最も重要な役割を以下のように割り出した。まず参加者側は、学習意欲をもってプログラムに参加することが求められる。また、受け入れ側は産業の魅力向上・維持に努めるべきである。そして運営側は、参加者側と受け入れ側が円滑にコミュニケーションできるプログラムを考案し、2主体をつなぎ合わせる必要があると考えられる。

これらの役割はそれぞれ相互に作用しあっており、図解す

ると(図1)のようになる。

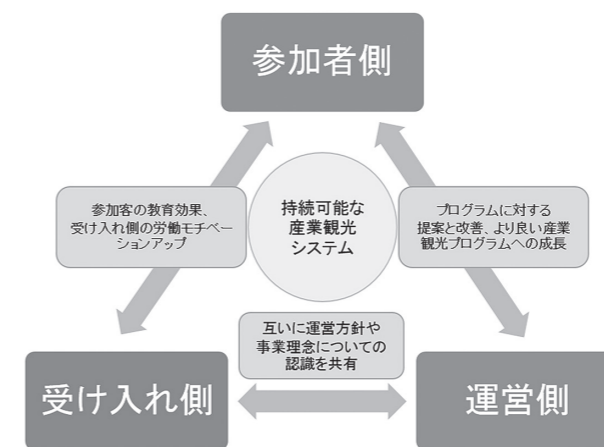


図1) 3主体の持つ役割の相互関係

この相互作用の中で最も重視すべきものは、受け入れ側と運営側間の理念共有であろう。これまでの結果を総合すると、運営側は受け入れ側の負担に配慮しつつ情報発信などの業務を担う必要があるため、その業務量・重要度は3主体の中で最も高いことが判明した。

また産業観光の持続性を高めるためには、数ある産業観光の有効性の中でも教育的効果を最も重視すべきである。産業観光を通して良質な学習の場を提供し参加者の産業・文化に対する理解度を高めることは、リピーターや製品のファンを生

み出すことにもつながる。また、参加者側から商品への意見を得られる貴重な場にもなりうる。

つまり、3つの主体がそれぞれの役割を果たせば、産業観光事業だけでなく産業自体にも好影響が生まれ自然に正のサイクルが回り始めるのである。またそのためには運営側(企画・コーディネーター)の役割が最も大きいものであることが明らかになった。だが、今回の実証実験は小規模事業所で行ったものであるため、大企業の場合はまた微妙に3主体の役割も変わってくるものと思われるが、それは今後の課題とする。

[主要参考文献、引用文献]

参考1) 須田寛/「産業観光 ものづくりの観光」/株交通新聞社/2015

参考2) 産業観光推進会議/「産業観光の手法 企業と地域をどう活性化するか」/株学芸出版社/2014